

てくてく
豊岡
復興建築



企画・発行 豊岡市
デザイン 合同会社つむぎ舎

はじめに

1925（大正14）年5月23日、北但大震災が発生しました。豊岡の市街地は大きな揺れとその後に広がった火災によって壊滅的な被害を受け、まちなみのほとんどが焼失しました。けれども人々は復興への道を歩み、近代的な都市計画のもとでまちは再び形を整えていきました。

あれから100年の歳月が流れました。震災直後の混乱と絶望の中から、豊岡の人々は力強く立ち上がり、復興への道を歩み始めました。その象徴となったのが「復興建築」と呼ばれる一連の建物群です。

都市計画および道路拡幅は震災以前から進められていましたが、震災復興計画の中でその方針が強化・加速されました。耐火性を重視した鉄筋コンクリート造建築は、復興計画の方針として官民に推奨され、現在の復興建築群の形成につながりました。

大開通りの中央には町役場や警察署、郵便局などの公共建築を集めた「シビックセンター」が整備され、復興の象徴となりました。これらの建物は当時の最新技術やデザインを取り入れたもので、近代都市としての豊岡の姿を示しています。

これらの復興建築は単なる防災対策にとどまらず、近代都市としての豊岡の姿を形づくる大きな契機ともなりました。今日、市内に点在する復興建築の数々は、当時の人々の英知と努力、そして未来を見据えた強い意志を今に伝えています。

本誌では、北但大震災からの復興によって築かれた豊岡の建物を取り上げ、その歩みや魅力をご紹介します。ぜひ本誌を手に取りながら市内を歩き、震災復興の記憶とともに今なお息づく建物群をご覧ください。過去を振り返ることは、これからのまちづくりを考えるきっかけにもなることでしょう。

もくじ

- 1 はじめに
- 3 豊岡の歴史と北但大震災
- 7 豊岡の復興建築群とは？
- 9 散策マップ
- 28 おわりに



豊岡の歴史と北但大震災

豊岡のまちの発展

豊岡のまちの発展には、円山川の船運が大きく影響していました。江戸時代には、玄武洞で切り出された玄武岩を使って川沿いに石垣が築かれ、船が川を上り下りする際に利用する「イト」と呼ばれる船着き場が各所につくられました。杞柳（きりゅう）製品をはじめとする豊岡の産物は、このイトを通じて舟に積み込まれ、海へ運ばれ、津居山や竹野で北前船に載せ替えられて全国へ流通しました。

1909（明治42）年には鉄道が開通し、高屋村と豊岡町の境に豊岡駅が設置されました。駅の開業もあいまって杞柳産業は大きな特需を迎え、翌年からの10年間で人口が22%増加するほど活気づきました。その結果、居住区域を拡張する必要が生まれていきます。



大豊岡構想 北但大震災

1918（大正7）年からは、好景気を背景に、「大豊岡の建設」を掲げた都市づくりが進められました。円山川の治水工事、丹但鉄道の建設、市街地や道路の整備など、近代的な地方都市を目指す構想です。これら一連の取り組みは「大豊岡構想」と呼ばれます。特に、たびたび洪水に見舞われていた豊岡にとって、円山川の治水は長年の悲願であり、まちの未来を左右する重要な事業でした。

1925（大正14）年5月23日午前11時9分57秒、豊岡のまちを激しい揺れが襲いました。震源は円山川河口数マイル、規模はマグニチュード7（『豊岡市史』より）。昼食前の時間帯だったこともあり、各地で火の手が上がり、市街地の7割が焼失しました。豊岡町では総戸数の実に86.6%にあたる1,887戸が倒壊・焼失したとされています。

『豊岡町震火災調査報告書』
震災予防調査会報告101号,1927（網かけ加筆）

被害の概要
全焼：1,712戸
全壊：826戸
死者：420人
負傷者：792人

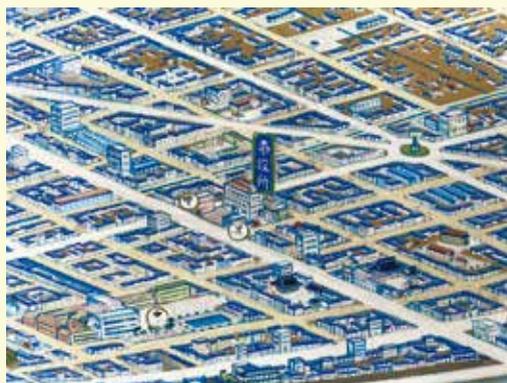
『円山川改修計画平面図』
所蔵：豊岡市立歴史博物館



震災復興

震災を機に、復興計画を作ることになり、この大豊岡構想と結びつき、より積極的に推し進められることになりました。特に重視されたのが、耐火建築を取り入れた都市づくりです。関東大震災からわずか2年後であったこともあり、国や兵庫県からの指導もあって、鉄筋コンクリート造による「震災復興建築」が導入されました。

復興の象徴となったのが、大開通り中央に整備されたシビックセンターです。ここには豊岡町役場を中心に、警察署・郵便局・税務署・消防事務所・警鐘台などの公共施設が集められました。それまで市内各所に分散していた行政機能が一角に集約され、近代都市としての姿が形づくられました。町役場は現在「豊岡稽古堂」として保存されており、震災復興のシンボルとして市民に親しまれています。

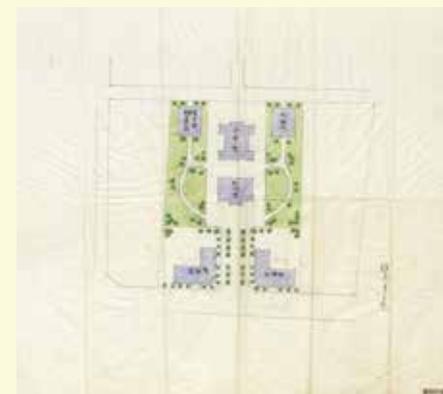


『豊岡市鳥瞰図』
所蔵：豊岡市立歴史博物館

また、民家に対しても防火耐震の意識を高めるため、鉄筋コンクリート造家屋の建設に補助金を支給する制度が設けられました。延べ床1坪につき50円が補助され、当時48人が利用したと記録されています。こうして市街地には鉄筋コンクリート造の堅牢な建物が現れるとともに、木造家屋にもタイル張りや漆喰仕上げ、銅板を用いた軒下、うだつの設置など、防火を意識した意匠が広まりました。

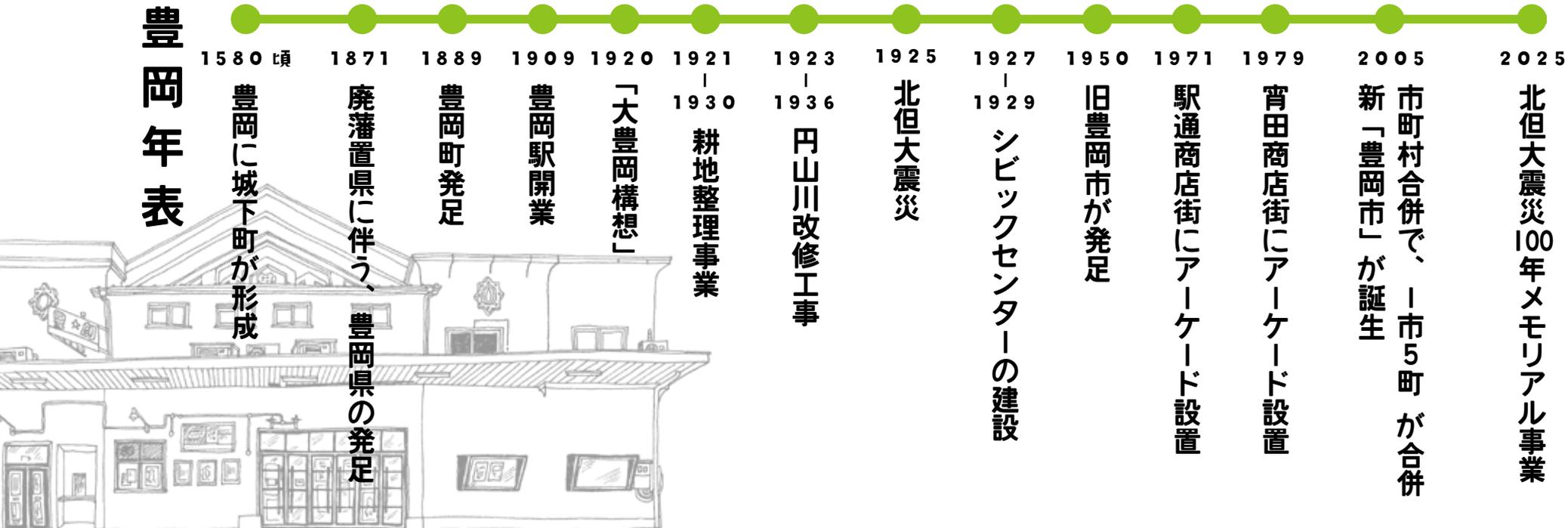
道路整備も復興計画の大きな柱でした。大開通りや元町筋では幅員を約11.8メートルに拡張し、両側に歩道を設けました。寿公園を中心に東西へ伸びる道路や、シビックセンター西側の道路も広げられ、格子状の街路網が整えられました。

こうして震災を機に、豊岡の都市は大きく姿を変えました。災害の惨禍を乗り越えて築かれた復興建築や街路は、今日に至るまで市街地の骨格を形づくり、人々の暮らしを支え続けています。震災から100年を迎えたいま、復興の営みを振り返ることは、未来に向けたまちづくりを考えるうえで大切な手がかりとなるでしょう。



『シビックセンター当初案』
出典：豊岡市提供「伊地知家文書」より

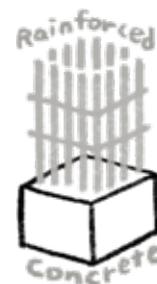
豊岡年表



豊岡の復興建築群とは？

豊岡市に残る復興建築は、北但大震災後の復興事業を通じて生まれた、当時としては先進的な建物群です。耐火性・耐震性に優れ、堅固な構造が現在まで良好な保存状態を保つ要因となっています。また、外観にはアーチ窓、縦長窓、モールディング装飾など、当時流行していた洋風の近代建築意匠が取り入れられ、和風の木造建物が中心だった以前の市街地とは異なるモダンな印象を生み出しました。さらに、建設時に街区全体で高さや外観の調和が意識され、道路沿いに同じスケールの建物が連続することで、統一感のある都市景観が形成された点も重要な特徴です。これらは豊岡の近代化の象徴として、現在も大きな価値を持っています。

豊岡復興建築の特徴



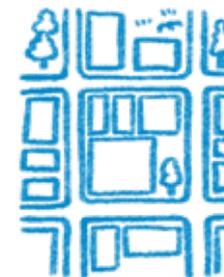
耐火・防火構造

火災に強い構造で再建され、安全性を最優先



洋風デザイン

アーチ窓や装飾など、西洋建築の意匠が積極的に採用



街区形成

震災後の道路拡幅で、街区が整い近代都市へ発展

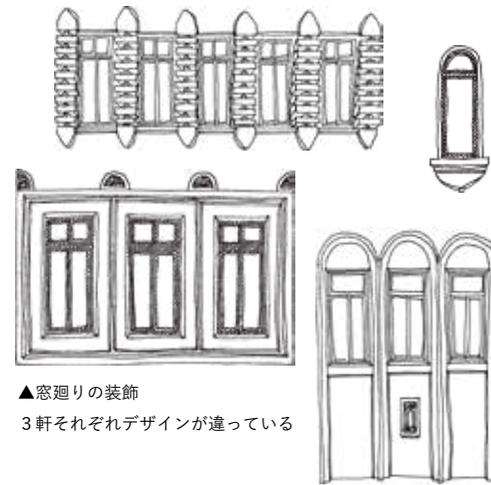
散策マップ

豊岡に残る代表的な復興建築を紹介します。

- ① 3軒長屋：佐藤家及び西村家住宅
 - ② 旧豊岡町役場庁舎：豊岡稽古堂
 - ③ 旧兵庫縣農工銀行豊岡支店：Toyooka 1925
 - ④ 11軒長屋：大開通南側長屋
 - ⑤ 鈴木家住宅
 - ⑥ 2軒長屋：十松屋及び河見家住宅
 - ⑦ 寿ロータリー
 - ⑧ 旧但馬貯蓄銀行：高石医院・豊岡画廊
 - ⑨ ふれあい公設市場
 - ⑩ キヌガワ株式会社
 - ⑪ 服部本社
 - ⑫ 豊岡劇場
- 有 国登録有形文化財
景 兵庫県景観遺産



有景 ① 3軒長屋：佐藤家及び西村家住宅



▲窓廻りの装飾
3軒それぞれデザインが違っている

昭和初期に建てられた鉄筋コンクリート造3階建の長屋形式の建物です。3戸が一体で設計され、1階は店舗、上階は住居として使われています。

佐藤家は当初呉服店で、現在は住居兼貸店舗（現セレクトショップ）として使用されています。西村家は金物店として入居後、現在は住居兼婦人服店として使用されています。ピラスターや水平ライン、各戸ごとの異なる装飾が立面に多様性を生み出しています。陸屋根だった建物には木造切妻屋根の増築もあり、復興期の都市景観を伝える貴重な建築です。

3軒長屋：佐藤家及び西村家住宅

住所：中央町5-44,45

構造：鉄筋コンクリート造3階建一部木造で増築

建築年：昭和初期

規模：間口約23.5m、奥行約8.9m

有景 ② 旧豊岡町役場庁舎：豊岡稽古堂



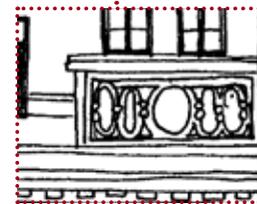
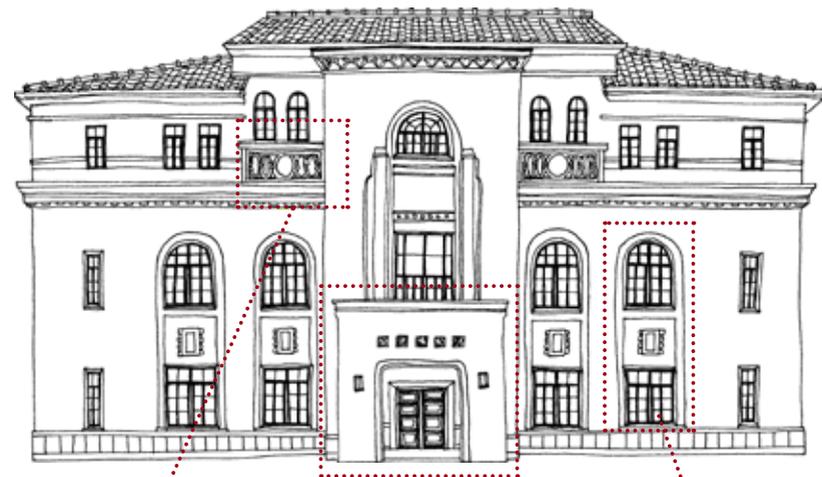
豊岡稽古堂は、大開通りの中央に位置する豊岡を代表する復興建築です。1925（大正14）年の北但大震災後、町内に散らばっていた役場や警察署、郵便局などの行政機能を集めた「シビックセンター」の中心施設として建設されました。設計は建築家・原科準平、施工は大阪橋本組が担当し、当初は2階建陸屋根に塔屋を備えた堂々たる姿でした。1952（昭和27）年には市制施行に伴う増築で三階建となり、寄棟屋根が架けられています。外観は間口32メートルを誇るシンメトリー構成で、中央の車寄せや塔屋、アーチ状の大きな開口部が特徴です。壁面には持ち送りやレリーフが施され、復興期の都市景観を象徴する重厚な意匠を備えています。

2005（平成17）年の市町合併による新庁舎建設に併せ、曳家工法で25メートル移動し、免震装置の上に再建されています。その後「豊岡稽古堂」と名付けられ、現在は展示や会議など市民に広く活用されています。2015（平成27）年には国の登録有形文化財に登録され、震災復興のシンボルとして親しまれています。



▲竣工時の様子

3階部は1952（昭和27）年に増築



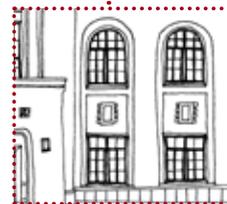
バルコニー風装飾

正面から見るとバルコニーのように見えますが、横から見ると奥行きはなく、バルコニー風の装飾です。



車寄せ

中央の車寄せとアーチ状の大開口が組み合わさり、堂々とした復興期建築らしい印象を与えます。



アーチ窓

左右対称に配置されたアーチ窓



旧豊岡町役場庁舎：豊岡稽古堂

住所：中央町2-4

構造：鉄筋コンクリート造一部鉄骨造3階建 瓦葺

建築年：1927（昭和2）年度竣工 / 1952（昭和27）年増築、2010（平成22）年曳家

規模：間口約33m、奥行約15m

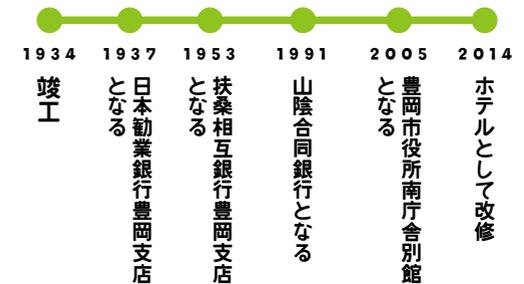
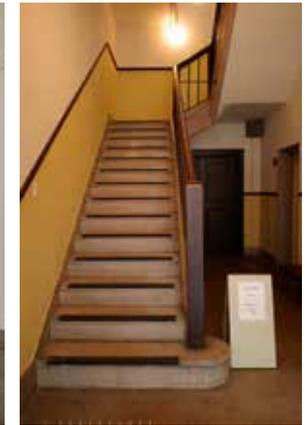
有景 ③ 旧兵庫縣農工銀行豊岡支店：Toyooka 1925



兵庫縣農工銀行は1916（大正5）年に豊岡町本町で営業を開始し、翌年宵田に支店を構えましたが、1925（大正14）年の北但大震災で火災の被害にあいました。建物は焼失せず残っていたため、震災直後から営業を再開し、罹災者への融資救済や低利貸出、償還緩和策を通じて地域復興に貢献しました。その後、宵田の道路拡幅で敷地が不足したため、1934（昭和9）年に現在地へ移転。シビックセンターの郵便局と向かい合い、大開通りの景観の中心を担いました。設計は関西の建築家・渡邊節、施工は清水組が担当しました。2014（平成26）年にはホテルへと改修され、今日まで活用されています。

建物は大開通りに北面し、入母屋屋根を持つ主屋と背後の付属屋でコの字型を形成します。正面から入ると2層吹き抜けのホールが広がり、かつては銀行窓口が配置されていました。西側部分にはオープングャラリーと個室が並び、ファサードでも2層に分節された構成が見られます。正面はシンメトリーで、両端の柱が建物を安定的に見せる一方、中央部はジャイアントオーダーのトスカナ式ピラスターと大開口でまとめられ、外観・内観ともに開放感を演出しています。

細部は簡素に整えられていますが、銀行建築にありがちな威圧感よりもおおらかさを感じられる点が特色です。大開通りの復興建築群の中でも意匠的に優れ、渡邊節の現存作としても貴重な建物です。



旧兵庫縣農工銀行豊岡支店：Toyooka 1925

住所：中央町 11-22

構造：鉄筋コンクリート造地下一階付2階建 寄棟瓦葺

建築年：1934（昭和9）年11月20日竣工

規模：主屋 間口約26m、奥行13m

景 ④ 11 軒長屋：大開通南側長屋



大開通りと亀山筋の交差点より西側に並ぶ11軒の長屋は、震災復興期に建設された大規模な共同建築です。面路部の奥行約5.5mを鉄筋コンクリート造で整え、その背後に木造家屋を配した混構造で、前近代的な町屋の空間構成を踏襲しています。

建設は1927（昭和2）年ごろとされ、谷山家を中心に共同建築化が進められました。建物は2階建てでパラペット天端の高さを統一し、各戸ごとに異なる装飾が施されています。

現在は住居、店舗、兼用など多様に利用され、建設当初の意匠やパラペット上の破風装飾など、当時の復興建築の面影を今に伝えています。

11 軒長屋

住所：中央町10

構造：面路部→鉄筋コンクリート造2階建（一部3階木造増築部あり）
後方→木造2階建

建築年：昭和初期

規模：鉄筋コンクリート造部分→間口約66.3m 奥行約5.5m

BOB



屋号をあしらったメダリオン装飾がかわいい。「〇に谷」のメダリオンはオリジナルですが、「BOB」のメダリオンは1960年代に付け足された装飾です。

景 ⑤ 鈴木家住宅

昭和初期に建設された店舗併用住宅で、大開通りに面した奥行約10メートルの部分が鉄筋コンクリート造となっています。外観で特徴的なのは、屋上部に設けられた王冠のような装飾で、中央には「鈴」と「木」をかたどったモチーフが施されています。1階窓上の蛇腹状の装飾や、2階窓の庇がつくる直線的な意匠によって水平性が強調され、それに対して王冠部分の曲線的な意匠が際立っています。1920年代建築の力強さと美しさを今に伝える建物です。



鈴木家住宅

住所：中央町9-1

構造：面路部：鉄筋コンクリート造2階建 屋根アスファルト防水 / 後方：木造2階建
建築年：昭和初期

規模：間口約5.6m、奥行約20.5m



コラレ 豊岡震災復興遺産プレート

まちなかを歩いているとこのようなプレートを見かけます。

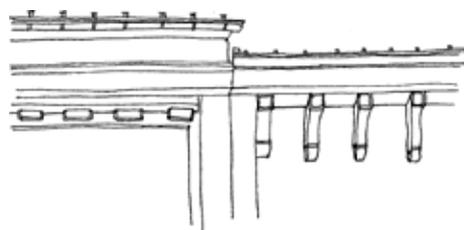
青銅色のプレートは国の登録有形文化財に登録された建物。豊岡市内には107件が、うち中心部には3件登録されています。

ゴールドのプレートは、兵庫県の景観遺産に登録された建物で、「豊岡震災復興遺産」として今までに市内の13件の建物が登録されています。

景 ⑥ 2 軒長屋：十松屋及び河見家住宅



鉄筋コンクリート造3階建の2軒から成る長屋で、上記の3軒長屋と同じ設計者によって計画されていますが、窓まわりの装飾は見られず、代わりにメダリオンが意匠上の特徴となっています。左側の建物には正方形を二つ重ねた八芒星、右側には菱形の装飾が施されています。八芒星は他の復興建築にも見られるモチーフですが、その意図は不明です。いずれの建物も、建設当初から同じ職種の商いが続けられており、昭和初期の暮らしとまちなみを今に伝えています。



屋根との境目にも歯型の装飾が見える。



それぞれの建物のメダリオン装飾

2 軒長屋（十松屋及び河見家住宅）

住所：中央町 5-41

構造：鉄筋コンクリート造3階建 陸屋根

建築年：昭和初期

規模：長屋全体 間口約 17.5 m 奥行約 11.5 m



コラレ ⑦ 寿ロータリー

豊岡駅から北東にのびる寿通りのほぼ中央に位置し、大正時代にパリの凱旋門のあるエトワール広場を参考に造られたロータリー交差点です。震災前の「大豊岡構想」の段階から計画されており、1923（大正12）年ごろに完成しました。日本では数少ないロータリー交差点で、六叉路になっています。

中央部の公園には、上水道建設費を全額寄付し、まちの発展に大きく貢献した中江種造翁の銅像が建てられており、この像も1925（大正14）年3月に完成しました。都市が近代化へ進む転換期の象徴的空間として位置づけられ、当時の都市計画思想を今に伝えています。



▲ロータリーの中央に建つ中江種造翁像

景 ⑧ 旧但馬貯蓄銀行：高石医院・豊岡画廊



昭和初期に建てられた木造の復興建築で、和洋折衷の意匠が特徴です。正面にはギリシャ風の柱が日本的な出桁造の瓦屋根を支えるなど、洋の様式と和の構法が巧みに組み合わせられています。木造ながらも木部は漆喰で覆われ、軒先には銅板が葺かれ、隣家との境には石造の防火壁が設けられるなど、防火への工夫も随所に見られます。戦前期の銀行建築として極めて意匠性が高く、現在は1階が医院、2階が貸しギャラリーとして再生利用されています。



▲ 横から覗くと和風建築であることがわかる

旧但馬貯蓄銀行（高石医院・豊岡画廊）

住所：元町12-6

構造：木造2階建 瓦葺

建築年：昭和初期～1934年（昭和9）まで

規模：間口約8.1m、奥行約20m

⑨ ふれあい公設市場



1926（大正15）年6月、震災後の物資不足と物価高騰を受けて、大開通沿いに公設市場が開設されました。町が営業者を公募し、日用品を適正価格で供給しましたが、商店街の復興と物価安定により1928（昭和3）年に廃止され、以後は私営市場として継承されます。現在も全長約75mの木造アーケードに20軒ほどの店舗が並び、青果や生花、飲食店などが営業中です。木造アーケードとしては国内最古級ともされ、震災復興の記憶を伝える空間です。



▲ 内部の様子

ふれあい公設市場

住所：千代田町3-6

構造：木造2階建3棟（半切妻屋根 瓦葺、大開通りのみ切妻屋根）によって構成され、通路上部は木造アーケード架構となっている。

建築年：1926（大正15）年開設

規模：長手長さ約75m

景 ⑩ キヌガワ株式会社



宵田通りに建つ復興建築。左側の鉄筋コンクリート造の建物は、壁面のセットバックやシンプルな水平帯が洗練された印象を与えます。

右側の木造建物は、縦長窓や水平の庇、三角形のパラペットが特徴的な洋風デザインで、隣接する鉄筋コンクリート造建築との調和を意識したものと考えられます。もとは理髪店として使われていた鉄筋コンクリート造建築を含め、現在、左側は鞆の修理・リメイクを行う工房、右側はその相談や衣服クリーニングの受付として活用されており、改修時には二つの建物の雰囲気을合わせるように工夫されています。



キヌガワ株式会社

住所：中央町 18-8,9

構造：南側：木造 2階建 瓦葺 / 北側：鉄筋コンクリート造一部木造 3階建 瓦葺

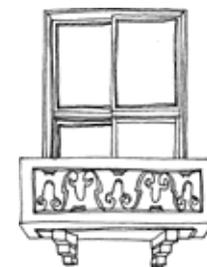
建築年：昭和初期

規模：木造：間口約 4.9m、奥行約 29m / 鉄筋コンクリート造：間口約 4.9m、奥行約 7.4m

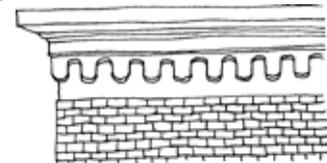
景 ⑪ 服部本社



「服部」は1885（明治18）年に京都で創業し、豊岡製の柳行李を海外に販売していた雑貨問屋でした。豊岡支店は震災で被災し、1927（昭和2）年に再建された建物が現在の本社です。鉄筋コンクリート造2階建てで、タイル貼りの外壁、石張りの腰壁、軒下の装飾、浮彫模様を施したバルコニーなど、洗練された意匠が特徴です。向かって右端の1スパンは後年に増築されており、本来バルコニーは立面中央にありました。建物の保存に配慮し、室外機は外壁から離して設置するなどの工夫もなされています。



バルコニー装飾



▲ ロンバルディア帯

（ロンバルディアが切れている部分は増築）

服部本社

住所：小田井町 13-25

構造：RC造 2階建 陸屋根 / 木造平屋瓦葺

建築年：1927（昭和2）年

規模：間口約 13m、奥行約 29.1m

12 豊岡劇場



豊岡劇場は、1927（昭和2）年に芝居小屋として誕生した建物です。北但大震災からの復興期に建てられた復興建築群のひとつであり、戦後は社交ダンスの場を経て徐々に映画館へと姿を変え、1951（昭和26）年に正式に映画館として営業を開始しました。鉄筋コンクリート造の堂々としたファサードには、震災を経験したまちが再び文化を求めた意志が刻まれています。

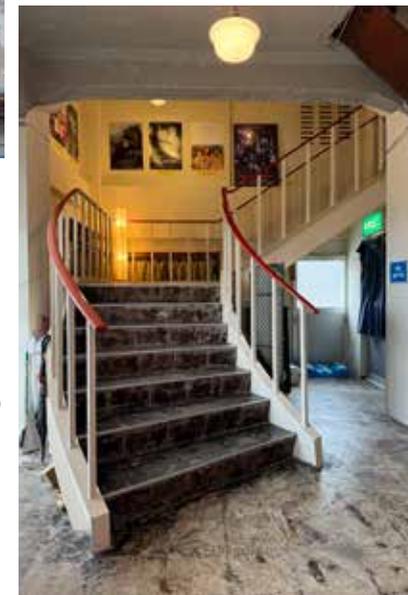
興味深いのは、建物が用途の変化に合わせて形を変えてきたことです。映画館への転用にあたり、芝居小屋の平土間はスクリーンを見やすくするため大きく掘り下げられ、くりぬいた土は後方に盛られました。こうして座席に傾斜が生まれ、入口と客席の高さが変わったため、現在は象徴的存在となっているホールの階段が後付けされたといわれています。

豊岡劇場

住所：元町 10-18

構造：鉄筋コンクリート造 2階建

建築年：1927（昭和2）年



但馬地域唯一の映画館として長く親しまれてきた豊岡劇場ですが、2012（平成24）年に一度閉館しました。その後、地元企業と市民の手により再生され、2014（平成26）年に再び文化の場として蘇ります。しかし、コロナ禍の影響を受け、2022（令和4）年にふたたび休館を余儀なくされました。市民有志による活動が広がり、2023（令和5）年3月、豊岡劇場は三度目の灯りをともしました。スクリーンの光とともに、豊劇の文化は今もなお受け継がれ続けています。



豊岡のまちには
他にも素敵な
建物がいっぱい！
🏠🏢🏡🏠🏢



掲載建物一覧

名称	竣工年	所在地	文化財等	ページ
3 軒長屋 (佐藤家及び西村家住宅)	昭和初期	中央町 5-44, 45	国登録 景観遺産	10
旧豊岡町役場庁舎 (豊岡稽古堂)	1927 (昭和 2) 年度	中央町 2-4	国登録 景観遺産	11/12
旧兵庫縣農工銀行豊岡支店 (Toyooka 1925)	1934 (昭和 9) 年	中央町 11-22	国登録 景観遺産	13/14
11 軒長屋 (大開通南側長屋)	昭和初期	中央町 10	景観遺産	15
鈴木家住宅	昭和初期	中央町 9-1	景観遺産	16
2 軒長屋 (十松屋及び河見家住宅)	昭和初期	中央町 5-41	景観遺産	17
寿ロータリー	1923 (大正 12) 年頃	泉町		18
旧但馬貯蓄銀行 (高石医院・豊岡画廊)	昭和初期～1934 年	元町 12-6	景観遺産	19
ふれあい公設市場	1926 (大正 15) 年	千代田町 3-6		20
キヌガワ株式会社	昭和初期	中央町 18-8,9	景観遺産	21
服部本社	1927 (昭和 2) 年	小田井町 13-25	景観遺産	22
豊岡劇場	1927 (昭和 2) 年	元町 10-18		23/24

参考文献

- ・豊岡町耕地整理組合事務所 編『豊岡町地区整理誌』, 豊岡町耕地整理組合事務所, 昭和 8. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1212988> (参照 2025-11-16)
- ・西村天来 著『豊岡復興史』, 但馬新報社, 昭 10. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1222095> (参照 2025-12-07)
- ・北但大震災による大火からの復興にみる地域空間形成と「近代」石榑先生ほか
- ・豊岡市史編集委員会 編『豊岡市史』下巻, 豊岡市, 1987.3. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/9576261> (参照 2025-12-04)
- ・地理院地図 - 国土地理院, <https://maps.gsi.go.jp/> (参照 2025-11-16)
- ・豊岡市ホームページ, <https://www.city.toyooka.lg.jp/> (参照 2025-11-16)
- ・兵庫県ホームページ, <https://web.pref.hyogo.lg.jp/> (参照 2025-11-16)
- ・国指定文化財等データベース, <https://kunishitei.bunka.go.jp/> (参照 2025-11-16)
- ・各施設のホームページ、パンフレット

資料・図版提供

- ・関西学院大学石榑督和研究室
- ・一般社団法人マチノイト
- ・豊岡市立歴史博物館

おわりに

ふだん歩いているまちなみの中には、100 年前に起きた地震をきっかけにつくられた建物がいくつもあります。でも、多くの人は気づかずに通り過ぎていきます。少し立ち止まって見てみると、形や素材、装飾など、その建物が生まれた時代の空気が静かに残されています。

これらは震災でまちが壊れたあと、「もう一度立て直そう」と人々が力を合わせてつくったもの。その過程には迷いや希望、工夫や挑戦があったはずです。今の豊岡は、そんな思いの積み重ねの上にあります。

建物はただ古いだけではなく、まちの記憶であり未来へのヒントでもあります。もしふと建物を見上げることがあれば、まちの見え方が少し変わるかもしれません。

本誌が、そんな小さな気づきのきっかけになれば嬉しいです。

